リフォーム産業新聞 2013年05月21日号 ［（株）リフォーム産業新聞社］

リフォーム産業新聞　〈平成元年9月8日第3種郵便物認可〉　第1073号

ビシッと決まっていると気持ちがいい

山一ホーム（千葉県柏市）
知久輝昭社長
昭和44年生まれ、千葉県出身。東京工科専門学校卒業後、大成建設入社。平成4年インテリア山一として創業ゼネコンの一次下請け業に従事、同11年に（株）山一ホームに社名変更するとともにリフォーム専門店として業態変更、現在に至る

古くはカジュアルフライデー、現在では「クールビズ」がビジネスシーンにおけるカジュアル化、おしゃれ化の代名詞ともなっている。今や男性も「外見より中身」ではなく、「中身も当然大事だが、外見も大事」という世の中に突入したようだ。

「ファッションを楽しむ」ことが趣味で、実際におしゃれである山一ホームの知久輝昭社長に話を聞いた。

新人研修に立ち会う知久社長の服装に注目！

――ファッションへの関心のルーツは

おしゃれかどうかは別として（笑）、洋服を選ぶ、着ることが根本的に好きですね。これは今思えば、父親の影響があると思います。父は現在、事業者ですが、当時はアパレル関係のサラリーマンでした。当然洋服へのこだわりや関心も高く、自分の服もそうですが子供の服にも生地選びからデザインまでこだわり、仕立て屋さんに連れて行ってもらった記憶があります。オーダーメードの服ですから自分サイズにピシッと決まっていて、そんな父親がカッコよく見えましたね。

――筋金入りのおしゃれさんだったのですね。ご自身はどのような服装がお好きですか？それと知久社長の素晴らしいところは、仕事着が格好良いところ。というか、私服と仕事着の区別がない？

私自身はイタリアンカジュアルを好んでよく着ています。仕事ではよくお客様から「建築業界の人っぽくない」と褒められ（？）ますね。やはり、ビシッと決まっているのは自分も周りも気持ち良いじゃないですか。だから社員にも「身なりを良くしなさい」と言っています。もちろん動きやすい格好であることが前提ですが。高い服を買いなさいとは言いませんが、日々の業務に追われて服装に構わなくなるのは良くないと思います。

――社長の影響で、社員の方も服装に気を遣うようになったのですね？

20代前半で経営者となりましたが、当時の建設業は3K事業種と呼ばれ、「キツイ、危険、汚い」といった悪いイメージがありました。そんな中で我が社にも社員が徐々に増えてきて、職場のマイナスイメージを変えるには、この3Kのうち〝汚い〟部分を変えればいいと考えたのです。

〝キツイ〟と〝危険〟は個人のスキルや考え方だから容易には変えられないけれど、〝汚い〟は自らの意識次第で変われるし、周りからも見た目の変化が感じ取れやすいと。業界のユニフォームは作業服が当たり前というなか、我が社は作業服をやめて作業がしやすい服装に変えました。

作業服ではないことで汚れれば汚さが目立つし、そうすると自然に着替えるようになる。すると気配りが出来ているとお客様にも褒められ、何より現場がキレイになります。おしゃれはもちろん自分のためにするものですが、人への気遣いや心遣いにも通じるものだと思います。

先日読んだ月刊誌「致知」に、まだ若かり　会社に勤めている、素晴らしい仕事をして　たとき、私は熱いという感情を捨てました。【あとがき】

2013年5月21日号
㈱リフォーム産業新聞紙
15面上段に、弊社社長の
『ファッションに対する想い』
のインタビューが掲載されました。

ファッションを通じ、自分自身のみならず、人（お客様）への気遣いや心遣いにも通じる想いが掲載されています。